論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　心理学　）	氏名	三　宅　英　典
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

幼児期における発話と身振りの統合的理解

論文審査担当者

主　　査	教　授	杉　村　　伸一郎
審査委員	教　授	中　條　　和　光
審査委員	教　授	湯　澤　　正　通

〔論文審査の要旨〕

本論文は，幼児期における発話と身振りの統合的理解の発達の解明と，統合的理解における指示語発話の効果を検討することを目的としている。本論文は３章構成であり，第１章「本研究の背景と目的」に続いて，第２章「指示語発話が発話と身振りの統合的理解に及ぼす効果」において実証的研究が報告され，第３章「総合考察」で研究の成果が論じられている。

第１章「本研究の背景と目的」は，以下の３節から構成されている。第１節「発話と身振りの統合的理解」では，発話に伴って産出される身振りには，しばしば発話で表現されていない独自の情報が含まれていることを指摘し，このような身振りが独自に伝達する情報を発話情報と組み合わせることで，聞き手が話者のメッセージ理解を行っていることを示している。次に，第２節「発話と身振りの統合的理解に関する発達的研究」では，このような統合的理解の発達的研究において，日常場面では身振りを指示する発話表現が共起することが多いが，その存在が考慮されていないことを挙げるとともに，統合的理解の発達において身振りの種類やその性質の違いが十分に考慮されていないことを指摘している。そして，第３節「本研究の目的」では，以上のような背景を踏まえ，統合的理解を促進する要因として指示語発話に着目し，幼児期の発話と身振りの統合的理解の発達を明らかにすることを本論文の目的としている。

第２章「指示語発話が発話と身振りの統合的理解に及ぼす効果」は，以下の４節から構成されている。第１節「発話と動作を表現する映像的身振りの統合的理解（実験１－１）」では，年少児 38 名，年中児 38 名，年長児 56 名の計 132 名を，指示語発話有り条件と無し条件に半数ずつ割り当てた。そして「投げる」や「書く」などの動作を伝達する発話と映像的身振りをビデオで提示した後，4 つの写真からメッセージと最も一致するものを選択させた。その結果，「こうやって」という指示語発話が有る条件の方が無い条件よりも話者のメッセージを正確に理解すること，指示語発話有り条件では年中児と年長児が発話と映像的身振りの情報を統合できるが，無し条件では年長児のみできることを示した。第２節「認知処理の負荷を低減した課題を用いた統合的理解の再検討（実験１－２）」では，年中児 24 名，年長児 25 名の計 49 名を対象に，課題の刺激や手続きを修正することで，幼児の

課題に対する認知処理の負荷を低減し，実験１－１の再検討を行った。その結果，統合的理解に対する指示語発話の効果が再現されるとともに，課題の修正によって動作の一部では統合的理解が実験１－１よりも容易になった可能性を示した。ただし，幼児にとっては，発話と身振りの提示方法（実演・ビデオ）の方が統合的理解に影響を与えることが示唆された。第３節「発話と事物の特徴を表現する映像的身振りの統合的理解（実験２）」では，年少児 33 名，年中児 40 名，年長児 32 名の計 105 名を対象に，クマの玩具や色紙などのような事物の大きさを伝達する発話と映像的身振りを実演で提示して，統合的理解に対する指示語発話の効果を検討した。その結果，統合的理解は，指示語発話が無ければ年長児のみ可能であるが，有れば年少児から可能であることを示した。第４節「発話と抽象的な程度を表現する暗喩的身振りの統合的理解（実験３）」では，年少児 31 名，年中児 40 名，年長児 34 名の計 105 名を対象に，喜怒や色の濃淡のような程度を伝達する発話と暗喩的身振りを実演で提示して，統合的理解に対する指示語発話の効果を検討した。その結果，統合的理解は，指示語発話が無ければ年長児のみ可能であるが，有れば年少児から可能であることを示した。

第３章「総合考察」は以下の２節から構成されている。第１節「本研究の成果」では，発話と身振りの統合的理解が身振りの種類や性質の違いにかかわらず，年少児から可能であることや，暗喩的身振りの統合的理解が成人と同等になる時期は，映像的身振りよりも後になることを論じている。また，本論文の知見をもとに，発話と描写的身振りの統合的理解の過程に関する仮説モデルを提案している。第２節「今後の課題」では，先に挙げた仮説モデルの検証とともに，指示語発話が統合的理解の過程においてどのように作用したのかを明らかにする必要性を挙げている。さらに，統合的理解の発達にワーキングメモリなどの他の認知能力が関連することや，個人内における発達的変化を検討する必要性にも触れるとともに，発話と身振りの統合的理解に影響を与える要因を本論文のように日常的な文脈から検討する重要性を論じている。

本論文は，幼児の日常的な文脈では，「こうやって」や「これくらい」といった身振りを指示する発話が伴われることに着目し，発話と映像的ならびに暗喩的身振りの統合的理解の発達について組織的に検討した点で高く評価できる。具体的には次の３点である。

1. 発話と身振りを提示する際に，身振りを指示する指示語発話を加えることで，年少児から統合的理解が可能になることを示した点。
2. 指示語発話が，身振りに対する注意の向け方や，発話と身振りが相互に意味的に制約しているという認識に影響を与えることを示唆した点。
3. 暗喩的身振りに関して，指示語発話があれば，従来は困難であると考えられていた年少児でも理解することができることを示した点。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 30 年 2 月 7 日